あるアメリカの詩人・作家たちのメッセージ

――ケルアック、スナイダー、ディキンスン――

田　中　泰　賢

1990年９月27日の学生新聞 “The California Aggie”（カリフォルニア大学デービス校）に「ジャック・ケルアックが復活」“Jack Kerouac is back” という注目すべき記事が掲載されている。1950年代、ビート世代の作家・吟遊詩人であったジャック・ケルアック（Jack Kerouac, 1922–1969）による自身の散文・詩のリーディング・歌等を Rhino Records が30年以上にわたって収集して The Jack Kerouac Collection として世に出した。このコレクションはケルアックの散文・詩を目玉として売り込んでいると書かれている。（Jim Veit 記者）

ジャック・ケルアックは1958年に *Dharma Bums* という小説を発表している。小原広忠氏はこの作品を『禅ヒッピー』（太陽社、1994）と題して訳している。氏によると「この作品はかなり自伝的な要素が濃く、一人称の語り手である主人公レイモンド・スミスには作者ケルーアックの姿が、そして心友ジャフィー・ライダーにはビートの詩人ゲーリー・スナイダーの姿が投影されている。むろんケルーアックとスナイダーは親しい間柄で、ともに1950年代のビート族（言わばヒッピーの、より文学的な前身で、そのメッカはサンフランシスコ）の代表的な文人であり、スポークスマンであった」[1)]。

この作品 *Dharma Bums*（『禅ヒッピー』）では主人公レイモンド・スミスことケルアックの愛する母親がノースカロナイア州のロッキィマウントという町に住んでいる。この州はアメリカ南東部大西洋岸に位置する。クリスマスに母親に会うためカリフォルニアからヒッチハイクの旅をする。途中ニューメキシコ州アラモゴルドに達した時、レイモンドはこう述べる。

> Alamogordo where the atom bomb was first blasted and where I had a strange vision as we drove along seeing in the clouds above the Alamogordo mountains the words as if imprinted in the sky:

> “This Is the Impossibility of the Existence of Anything” (which was a strange place for that strange true vision) …[2)]

レイモンドはニューメキシコ州アラモゴルドに来た時、そこは原爆実験が行われたところだと述べる。そして更に続けてこう述べる。アラモゴルド山脈の上に浮かぶ雲にこの原爆実験はあらゆる生きとし生ける者にとってあってはならないことであると刻まれた文字が見えたと不思議な光景を語る。この原爆実験をレイモンドは最大限の言葉を使って批判している。1958年は原爆実験が行われた1945年7月から10年余りしかたっていない。そんな時の言葉である。最初に取り上げたカリフォルニア大学デービス校の学生新聞の「ジャック・ケルアックが復活」という見出しからケルアックを評価しようとする若いアメリカ人がいることがわかる。中野重治氏は次のように語っている。

> 戦争をしかけたものが罰せられねばならぬ以上、原爆投下を目論んでこれを実行したものは必ずともに罰せられねばならぬという声はアメリカからも起こってきた。
>
> この声は、戦後の世界を世界平和確立の方向ですすめようとする民主的な国々、人々の、平和確立のための献身的活動の増大とともに大きくなった。なぜかといえば、この国々、この人々は、おれのところには原爆があるぞ、そのストックは大きいぞ、おれの言うことを聞かねばこれを見舞うぞという勢力とたたかわねばならず、ここからも、新しい原爆投下を脅迫として振りかざす勢力と、かつて長崎・広島に原爆投下をあえてした勢力とが同じものであることが明らかになってきたからであった（1952年5月28日）[3)]。

中野重治氏が述べているように原爆投下はアメリカからも批判が起こっている。ケルアックは直接原爆投下には言及していないが、原爆実験という角度から原爆そのものを批判している数少ないアメリカ人であった。鶴見俊輔氏は「（原爆投下は）アメリカとソ連の対立、左翼と右翼などという区分の中にとじこめることのできない事件である。私たちは、私たちにのこされた時間の中で、このことをどう考えてゆくか。原爆にうたれた峠三吉は、一つの手がかりをのこした」（1995年6月12日）と綴っている[4)]。峠三吉は謳う「列、/ 列、/ 不思議な虹をくぐって続く / 幽霊の行列、/ 巣をこわされた蟻のように」[5)]。峠三吉の「不思議な虹」はケルアックの「アラモゴルド山脈の上に浮かぶ雲」と重なってくる。それは奇妙ではあるが、偽りのない光景であった。

2017年7月7日ニューヨーク国連本部の会議において「核兵器禁止条約」が採択された。「被爆者の方々はこの国連の核兵器禁止条約を歓迎する」（“Hibakusha hail U.N. A—bomb ban”,

The Japan Times on Sunday, July 9, 2017）と報道された。広島で被爆して後、核兵器禁止条約締結のために献身された Setsuko Thurlow 氏は「70年間この日を待っていた。この核兵器禁止条約は核兵器廃絶への始まりです」と喜びを語っている[6)]。レイモンドことケルアックは母親の住む故郷に帰るが、森に行って坐禅をするのが日課であった。森に行った時の様子をレイモンドは語る。

> The woods received me well. I amused myself writing little Emily Dickinson poems like “Light a fire, fight a liar, what’s the difference, in existence?” or “A watermelon seed, produces a need, large and juicy, such autocracy.”[7)]

小原広忠氏は次のように訳している。

> 森はいつもぼくを気持よく受け入れてくれた。ぼくは慰みにエミリイ・ディキンソン（アメリカの孤独な、思索的な女流詩人（1830–86））ばりの小詩を作ったりもした、例えば「明りをともすも、悪友（ともだち）を懲らすも、ともに変わらぬこの世の行為。」とか「西瓜の種（シード）が産み出す貧苦（ニード）、嵩は大きく水気（ジューシー）はたっぷり、まったく何たる独裁（オートクラシー）ぶり。」とかそんな風な詩だった[8)]。

同じ所を中井義幸氏は次のように訳している。

> 森は、いつ行っても私を暖かく迎え入れてくれた。私はエミリー・デッキンソン流の短詩を書いては、一人で面白がっていた。「火をともす　屁をかます　どこがどう違う　実在の上で」とか、「スイカのタネは　なやみのタネ　でっかくてよくうれた　どぶどぶのどくさいしゃ」とかいった調子だ[9)]。

エミリ・ディキンスンが登場している。1951年にハーバード大学出版から Thomas H. Johnson 編集によるエミリ・ディキンスン詩集が出ている。だからケルアックがエミリ・ディキンスンという名前を取り上げているのは画期的なことではないだろうか。2007年 9 月 8 日（土曜）、私はトマス・ヒギンスンがかつて住んでいたアメリカ、ロードアイランド州ニューポートを訪れた際に、『海辺の歌』詩集 *Thalatta: a book for the seaside* 1853をニューポート公立図書館のトマス・W・ヒギンスン作品集コーナーで閲覧出来た。この詩集の表題の下に手書きで “Edited by T. W. Higginson & S. Longfellow” と書いてあった。この『海辺の歌』は1853年に

トーマス・ウェントワース・ヒギンスンとサミュエル・ロングフェローの編集で出版されている。この選詩集はギリシャのホメロス、イギリスのウイリアム・シェークスピア、ウィリアム・ワーズワス、ドイツのゲーテたち、欧米の詩人たちの海に関する127篇の詩が収められている[10)]。

トマス・ウェントワース・ヒギンスンはエミリ・ディキンスンの文学的指導者であったことはよく知られている。トマス・ヒギンスンはエミリに会うため1870年と1873年に遠路はるばるアマストの町を訪ねている。直接エミリ家を訪れた数少ない一人であった。二人の文通は終生続いた。

「エミリ・ディキンスンは『(スプリング・フィールド）リパブリカン』を「毎晩」（書簡133番）読んでいて、政治的なニュースや意見だけでなく、芸術、文学、宗教、科学、またその他多くの当時の興味深い事柄の動向についての記事を読んだ。」[11)]そこでトマスたちの編集の『海辺の歌』が『スプリング・フィールド・リパブリカン（*The Springfield Daily Republican*）誌に紹介されていたかどうか調べてみた。幸いにも京都産業大学の図書館は2009年10月10日（土曜）に *Springfield Daily Republican* のマイクロフィルムの閲覧を許可してくださった。閲覧していると1853年5月16日発行されたこの新聞の次の記事が目に入った。

「New Books: Thalatta: a book for the sea-side」1853年5月16日（16 May, 1853）(Whole No. 2802)」

エミリ・ディキンスンはこの新刊書のことを知った可能性が高いことがわかった。また『エミリ・ディキンスン事典』によるとエミリ・ディキンスン家には『ハーパーズ・ニュー・マンスリー（*Harper's New Monthly Magazine*)』が1851年1月から届けられていた[12)]。そこでこの『ハーパーズ・ニュー・マンスリー』も調べてみた。

幸いにも、私は2009年9月19日（土）南山大学瀬戸キャンパスで *Harper's New Monthly Magazine* を閲覧することが出来た。この雑誌の1853年7月号に次のような記事が掲載されていた。

"*Thalatta, a Book for the Sea Side*, is the title of an admirable collection of poetry, relating to the ocean, published by Ticknor, Reed, and Fields. The volume proceeds from a happy idea, and has been executed with no small degree of success. The taste and poetical reading of the editors are visible on every page." (Harper's New Monthly magazine No. XXXVIII. —July, 1853. Vol. VII., p. 282.)

つまりエミリ・ディキンスンはトマス・ウェントワース・ヒギンスンとサムエル・ロングフェローの編集した欧米名詩選集『海辺の歌』を1853年の新聞と雑誌で知っていた。エミリ・ディキンスンが海についてうたわれた『海辺の歌』を読んだかどうかは定かでない。古川隆夫氏が述べるように「エミリが、海の詩人といわれてもいいほど、多くの詩を書き、また船の詩も書いている。つまり彼女は、それが大詩人の資質なのだが、彼女の想像によって〈海〉を描いている場合が多い」[13)]。エミリ・ディキンスンはその詩集を読んでいても、いなくても新刊書紹介の題名にある「海」からも触発されていくつかの海の詩が生れていったと考えられる。もちろんそれだけではないであろうが。

岩田典子氏はエミリ・ディキンスンの海の詩を訳している。

荒れ狂う　荒れ狂う夜！
もしあなたと一緒なら
嵐の夜も
二人の華麗な宴となる

港に抱かれたこころには
風もとるにたりない
羅針盤も捨て
海図も捨て

楽園に漕ぎだしていく
ああ　海よ！
今宵　あなたのなかに　もし
錨をおろすことができるなら！[14)]

岩田氏はこの詩について「愛の歓喜はこの世の楽園となり、さらに強い願望として、大胆な性のイメージが最終行にむかってもりあがっていく。1891年、彼女の詩集を編むとき、批評家のヒギンスンは素晴らしい作品だが、処女の世捨て人がいつもこんな夢を抱いていたと読者にとられたら困ると心配した。しかし「これを詩集からはずすことは、大変な損失！」と考えて入れることにした。人々の関心が神にあった時代に、彼女は自我を主張し、タブーとされていた性を書いた。20世紀を先取りするかのように、「情欲の魔力に捉えられ」、情欲をうたいあげた」と解説している[15)]。これは核心をついた説明ではないだろうか。ケルアックの作品

The Dharma Bums でジャフィーことゲイリー・スナイダーは次のように語る。

> “Smith, I distrust any kind of Buddhism or *any* kinda philosophy or social system that puts down sex,” said Japhy quite scholarly now…[16)]

ジャフィー・ライダー（ゲイリー・スナイダー）はレイモンド・スミスに「どんな宗派の仏教であれ、どんな思想であれ、どんな社会システムであれ、性を卑しめるんだったら信用しないよ」と言う。ジャフィーの発言を補足すべく仏教学者の金岡秀友氏が「愛欲」について詳しく述べておられるので少し紹介したい。氏はこう言う。「日本人は性に対してつねにはじらいとつつしみをもっていたという点である。略。ヨーロッパの文学や絵画が追及する性の世界は、東洋人の追うことをこばむ強烈な肉のにおいがある。略。このような、ヨーロッパ人の「人間追及」は、キリスト教のもつ原罪観を克服しようとする志向の上に立つものであり、したがって、それはいかに極端な人間肯定の書のように見えようとも、けっして単純・素朴なものではなく、一度は人間否定の教えを知った上での屈折した肯定の書であったことを忘れてはならない。略。それに反して、東洋、ことに日本では、宗教の圧力も、それに立ち向かう性も、ともにそのように決定的ではない。宗教はおだやかにその道をとき、性はかるく人生の楽をうたう、ふたつの人性の目的が火花を散らしてぶつかりあうことは稀であった」[17)]。

氏は更にこう述べる。「（仏教では）本質的には、性の欲望も、他の欲望も同質に見る観念のうちから、性の絶対的罪悪観は生れにくい。性を不浄とみる仏教徒の観念は、性の本質的罪悪視というよりは、性的対象をことさらに醜化することによって性の欲望を抑止・抛棄せしめんとする実際的考慮に基づいていたように思われる。このため、仏教徒の性に対する意識的な禁忌は、かえってはなはだ反感覚的・反自然的であり、したがって極度に観念的にさえなったことがある」[18)]。

ケルアックの *The Dharma Bums* でジャフィー・ライダー（ゲイリー・スナイダー）は “I'll do a new long poem called ‘Rivers and Mountains Without End’…”[19)] のように語っている。ジャフィーは『終わりなき山河』を書く予定だという。それが小説の中の話に終らず、後にスナイダーは本当に詩集『終わりなき山河』を出版した。私が最初に読んだのは1979年版の *Sections from Mountains and Rivers without End plus one* である。その中の “Blue Sky” についてまとめた拙論が「ゲイリー・スナイダーの詩作品 The Blue Sky における元型的心象」『サイコアナリティカル英文学論叢』第6号（1982）：23–43であった[20)]。そしてその集大成としてスナイダーは *Mountains and Rivers Without End* (Counterpoint, 1996) を出版している。その日本語訳『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳（思潮社、2002）が出版されている。

The Dharma Bums でケルアックはアメリカの原爆の実験を批判しているが、59年後の2017年7月ニューヨークの国連で122カ国の賛成で核兵器禁止条約が採択された。ケルアックは当時それほど知られていなかった詩人のエミリ・ディキンスンを取り上げているが、今やエミリ・ディキンスンは世界的な詩人になっている。2017年には彼女の半生を描いた映画が日本でも上映されている。そしてジャフィーことゲイリー・スナイダーは本当に詩集『終わりなき山河』を書いたのである。

私は2011年10月22日、日本英米詩歌学会第24周年記念大会（於椙山女学園大学星が丘キャンパス）で「Gary Snyder: *Mountains and Rivers Without End*」と題して口頭発表した。今その時に作成したハンドアウトを見ると、『終わりなき山河』の中に点在する排泄物（大少便）を取り上げている。スナイダーは日本に来る前から仏教に関心を持ち、日本で10年にわたり禅の修行をして後アメリカに帰国してから今日までおよそ70年余の間仏教、特に禅の研鑽を続けている。そのことと詩集の中に書かれている排泄物（大小便）とは大いに関係があると思われる。

この詩集はミラレパの言葉（1行）と道元禅師の『正法眼蔵の「画餅」（13行）の引用がら始まっている。つまりこの詩集では道元禅師の言葉が大きな意味合いを持っていることが推察される。スナイダーが引用した後半部分を取り上げる。日本語は山里勝巳・原成吉訳『終わりなき山河』（思潮社、2002）を使用させていただいた。

> “If you say the painting is not real, then the material phenomenal world is not real, the Dharma is not real.”
>
> “Unsurpassed enlightenment is a painting. The entire phenomenal universe and the empty sky are nothing but a painting.”
>
> “Since this is so, there is no remedy for satisfying hunger other than a painted rice cake. Without painted hunger you never become a true person.”[21)]

「もし画は真実にあらずと言うのであれば、宇宙のあらゆるものもまた真実のものではない。宇宙の一切のものが真実のものではないとするならば、仏法もまた真実にあらずと言うべきであろう」

「最高の悟りもすなわち画図、描かれた絵なのである。一切の宇宙も空間もすべて画図なの

である」

「それゆえ、画餅よりほかに飢えを満たすものはなく、また、画飢を持たねば真人になることはありえない」[22)]

では道元禅師はこの『正法眼蔵』「画餅」の巻で何を述べているのであろうか。道元禅師は仏道を修行する人たちに古仏の言っている「画餅不充飢」を参究するように投げかけている。「画餅不充飢」を役に立たない例えとして画にかいた餅は飢えを充たさないと解するなら一面的な見かたであると批判する。「正伝の仏法の中では、自己も万法も、全てが真実であるから、画餅と本当に口に入れる餅との対立を求めない。もし、画餅が仏法の中で、飢えを充たさないものとして捨てられるなら、仏法自らの力が減殺される。尽十方界、尽界を仏法として見る仏道修行者の受けとり方を説く」と水野弥穂子氏は解説している[23)]。

「道元禅師は画にかいた餅が飢を充たすことができない事態を充分に認識した上で、今度は具体的な個個の事物が、画にかいた餅すなわち抽象的な表象を通して把握され、実在としての意味を持って来ることを、古仏たち（名前略）の言葉を引用しながら、明解に説いておられる」と西嶋和夫氏は説明している[24)]。その画餅とは両親のおかげによってこの世に生まれた姿であり、両親の生れる以前の世界の姿でもある。山水を画くには絵の具を用い、画餅を画くにはお米を用いる。だから「その（山水を画くにも画餅を画くにも）用いる所は同じであり、（自己の生きている真実の）工夫（しゅぎょう）（としては）等しいのである[25)]。そのように工夫（しゅぎょう）するとき、生死去来は、すべて（生きている全体で描き出す）画図である。無上菩提もそのまま（生きている全体で描き出す）画図である」[26)]。

「つまるところ、この世界もこの存在もことごとく画図であるのだから、人も存在も画によってあらわとなるのであり、仏祖もまた画によって成るのである」と増谷文雄氏は表現している[27)]。そして玉城康四郎氏も「まさしく全世界・全存在は、ことごとく描かれた絵であるから、人も事象も、すべて絵より現れ、仏祖も絵より成就するのである。そういうわけであるから、「描かれた餅」でなければ、飢えを充たす薬はない。また「描かれた飢え」でなければ、人に出会うことはなく、また、「描かれた充」でなければ、力量は出てこないのである。略。この大切な主旨を参学するとき、「物を転じ、物が転ずる」という働きを、身心に究めつくしていくことができる」と訳している[28)]。「戒法を受け、大自然の摂理の霊妙さに目覚め、坐禅を中心とした生活を始めるとき、十方世界の土地も草木も、あるいは石垣や土塀、さらにはかわらけや石ころ、ありとあらゆるものがことごとく仏のありようを示し始めて、それらが発するある種の霊気があちこちに及び、それにふれると、摩訶不思議な仏の恩恵としか言い得ない

ようなおかげを知らずしらずのうちに受け、親密な（天地いっぱい渾然一体となった）さとりのすがたを示すのである」と道元禅師は示しておられる[29)]。

道元について長年にわたって研究している辻口雄一郎氏は次のように論じている。

> 今日私たちは、「もの」を、もっぱら機能的側面からのみ捉えている。しかし機能を引き出すことを目指す「もの」との関係の追及は、一層巨大で深刻な「事故」の危険をも増大させてきた。私たちは、このことをどう考えたらよいのだろうか。たとえば2011年には三陸沖で巨大地震が発生し、巨大な津波が東日本の太平洋岸をおそった。この津波の影響で、福島県で発生した原子力発電所の炉心溶融事故は、当初「想定外の事故」と呼ばれた。しかしそれに対して世の人々は、それを「いいわけ」であるとし「想定外」などとはいわせないと非難した。それならば、今後、より厳格な想定をすれば、もはや原発事故は発生しなくなるのだろうか。私たちはテクノロジーの巨大化と並行するかのように巨大化する事故を目の当たりにして、今や「もの」との関わりについて、あらためて考え直す時に来ているのではないだろうか[30)]。

辻口氏は過度な機能主義的な「もの」観を乗り越えるためには道元の『正法眼蔵』、この場合は「画餅」の巻が手がかりになるのではないかと言う。つまり「物を転じ、物が転ずる」力を参究していくとき、自分にとってのみの有益な視点ではいかがであろうかということになってくる。辻口氏は更に次のように述べている。

> 我々が「想定外の事故」と呼ぶものは「もの」の無限の働きが、人間の価値的世界の網をやぶって発現してくることであって、我々の包囲網がどれほど多面的になったとしても、それによって、ものの存在を包囲し尽くすことは原理的に不可能なのである。だから私たちにとって必要なことは、決して事故を起こさないことを目的とする安全対策ではなく、事故は必ず起こることを前提とした、安全対策ではないだろうか。通常経済的な観点から資源、エネルギーとして捉えられる自然界と、そこに存在する「もの」をこうした観点から捉え直すことは、資源開発や、自然災害、環境問題等に対する一つの原理的な立脚点として、ガイア仮説等に見られる全体主義的視点とは異なる可能性を秘めているということができるのではないだろうか[31)]。

スナイダーは詩集『終わりなき山河』で排泄物（大便）を次のように表現している。

Nearby, a rocky point.
Climb it,
passing a tidy scat—arrangement on a ledge,
stand on a dark red sandstone strata outcrop at the edge.（下線筆者、以下同じ。）[32]
（近くに、ごつごつした岩場。
それを登る
動物の糞がきれいに並んだ岩棚をすぎ
先端にあるくすんだ赤い砂岩がむきだしになった地層に立つ。）（下線筆者、以下同じ。）[33]

ここでは排泄物（大便）は “scat” という表現が使われている。これは「山の精（*The Mountain Spirit*）」という詩の中に登場する。この詩の最初に「絶えることなき生命の車輪（Ceaseless wheel of lives）」が2回繰り返されている。川、山、雲、氷河、全てが循環し、変化を続ける。「仏陀のようにそびえ立つ　山頂から / 送り出される水の流れは / 回る地球の中心へと向かう」（Peaks like Buddhas at the heights / send waters streaming down / to the deep center of the turning world）[34]。この循環を歌う詩において「排泄物、大小便」は詩のなかで大切な役目を果たしている。道元禅師は『正法眼蔵』「洗浄」の巻で次のように語っている。釈尊の弟子の一人、ラゴラがお便所に宿をとったことがあった。そのことを知った釈尊はラゴラの頭をなでて、あなたがお便所に宿をとったのは貧しいからではない。また富貴を失ったからでもない。ただ仏道を求めるが故である。出家者は苦を忍ばなければならないと語ったのである[35]。仏教において、また禅においてもお便所は修行をする大切な所であり、清掃して、気持ちよく使用できるように工夫する。それをとりまく排泄物を含めた全てはまた修行の対象になる。

“Shining Heavens,” Goddess of the Sun,
her brother flung
mud and shit and a half—skinned pony through
the palace,
so she entered a cave—shut it up with a rock—
made the world dark.[36]
（「光り輝く天（アマテラスオオミカミ）」、太陽の女神は
無鉄砲な弟が
泥や糞、それに皮を半分剥ぎとった馬を
祭壇にあたりかまわず投げつけたので

怒って岩屋にこもり―入口を岩で塞ぎ―
世界を闇につつんだ。)[37]

上の一節は「ダンス（The Dance)」の中にある。さきほどの詩では排泄物は “scat” と表現されていたが、今度は “shit” という言葉が使われている。この詩では川の流れをダンスに例えており、日本語の「舞い」をそのままローマ字表記している。源流（headwaters）は川（creeks）になり曲がりくねって進む（meander)。そして「塩と黄金を海へもたらす」(putting salt and gold dust in the sea)。ここも循環が示唆されている。ちなみに松生恒夫氏（医学博士）は次のような報告をしておられる。「2011年の調査に引き続いておこなわれた、2013年 3 月（対象者の小学生5441名、母親4309人に拡大）の結果をみてみますと（ニュートラシューティカルズ事業部製品部調査)、毎日排便がない子が52.6パーセントと半数以上、つまりは前回調査よりも増加しました。さらには、全体では 2 割強の母親が便秘気味だと感じていました。では食材に関しての意識をみてみますと、子どもの食物繊維が足りていないと思っている母親は48パーセントであり、52パーセントは不足を認識していました。また、子どもに意識的に食物繊維を摂らせている母親は51パーセントで、残りの49パーセントは意識していないという答えを示しています」[38]。この調査結果は私たちが食事を頂き、順調な排泄により、健康な生活を保っていくという体の循環に対して大切な情報を提供している。

all this in 5,086 coyote scats:
…
ten thousand years of living
—thousands paleo human droppings in the
Lovelock Cave—

Great tall woodrat heaps. Shale flakes, beads, sheep scats,
flaked points, thorns,
piled up for centuries
placed under overhangs—caves in cliffs—
at the bottom, antique fecal pellets;
orange—yellow urine—amber.
Shreds of every bush that grew eight thousand years;
another rain, another name.[39]

（以下のすべては、5086個のコヨーテの糞より検出。
略。
一万年の営み
　—ラヴロック洞窟には
　　数千個の旧人の排泄物—

モリネズミのものすごい堆積物。泥板岩の薄片、数珠、ヒツジの糞
鹿の角の薄片、刺が
何世紀にもわたって積み上げられ
それが張り出したものの下に—崖の洞窟—
その底には、古い時代の排泄物。
オレンジがかった黄色　尿のような琥珀色。
八千年の茂みの営み、そのすべての名残がここにある。
　　雨が降って、新たな名前。）[40)]

上の詩行は「古いモリネズミの悪臭を放つ家（Old Woodrat's Stinky House）」で書かれている。ここでは排泄物（大便）は "scats"、"droppings"、"fecal pellets" と表現されている。「尿」（urine）も 見える。上の詩行では省略したが、この詩ではサバクモリネズミが小枝を集めた巣に尿を塗ることによって完成することも書かれている。40年ほど前にインドの仏跡参拝旅行に参加したことがある。インドでは牛の糞を乾かして燃料として使用していることを知った。

Pellet piles in moss
a spiral horn in the grass
long tundra sweeps and the rise of slopes
to a peak of Doonerak,
white sheep dots on the far green
…
warmer, cooler, air—mass swirls
like the curls
of Dall sheep horns. The "feet"
of the onward paces of skulls and pellets—
clouds sublimate to pure air
blowing south through passes

feeding the white dot Dall sheep—dew.[41)]
(苔のなかにはあちこちに糞の山
草のなかには螺旋形の角(つの)
ツンドラの長い広がり、斜面は
ドゥーナラック山の頂へと続いている
はるかな緑に、白いヒツジの点てんが見える
略。
かれらドール・シープの角のように
カールしながら
上昇、下降をくりかえし
暖めたり、冷やしたりする気団の渦巻きと一緒に
ヒツジたちは雲の群れを切り開く。頭蓋骨と糞の
前進する「足」—
雲は昇華して混じりけのない大気にかわり
南風となって峠をぬけて
白い点、ドール・シープを養う—露となって。)[42)]

この一節は「北極地方の真夜中　薄明りに　涼しい北風　雲低くかかる　緑の山の斜面に白い山ヒツジ（Arctic Midnight Twilight Cool North Breeze With Low Clouds Green Mountain Slopes, White Mountain Sheep）」という長い題名の詩から引用したものである。ここでは排泄物は “Pellet” また “pellets” になっている。オックスフォード新英英辞典では “a small round piece of animal faeces, especially from a rabbit or rodent”（小さな丸い動物の糞便、特にうさぎ或いはげっ歯類動物）となっている。もちろん “faeces” は “feces” と同じである。ここでもゆっくりとした循環のなかでヒツジは生活している様子が書かれている。

Varanasi

They eat feces
in the dark
on stone floors
one-legged monkeys, hopping cows[43)]
(ヴァラナシ

彼らは糞を食べている
　　暗がりの中で
　　石の床の上で
片足の猿たち、片足で跳びまわる乳牛たち)[44)]

上の詩行は「マーケット（The market)」の一節である。ここでは排泄物は “feces” である。さきほど述べたようにイギリス英語では “faeces” である。この一節の最初の行に「彼らは糞を食べている」という表現がある。有田正光・石村多門氏は「生きるとはウンコを食べることである」と題して興味深く説明している。その一節だけを引用させていただく。「もっともっと大きい生態学的循環の中で、われわれは小便を飲みウンコを食べているのではないか。だとすれば、再検討さるべき重要な問題は、現在の大規模技術による水循環よりもむしろ、旧来の農業のほうが壮大な水循環を実現していた、という点にある。つまり、江戸時代よりも今日のほうが、ウンコをすぐ口に運んでしまうシステムになってしまっているのである」[45)]。

「ヴァラナシ」という都市が表示されている。この町は仏教でも釈尊がこの郊外「鹿野苑（ろくやおん)」で初めて説法したことで有名で、仏教の四大聖地の一つである。13世紀に中国で『無門関』という書物が刊行されている。優れた禅の体験が収められたもので、禅の指導者が修行僧のために用いる書物の一つである。その中の第21則「雲門屎橛（うんもんしけつ)」という公案がある。雲門禅師に一人の僧が「仏とは何ですか」と問うた。すると禅師は「乾屎橛（かんしけつ)」と答えた。さきほど述べたように禅仏教もお便所を修行の大切な場所とみなしている。従ってこの問答はお便所の中でなされたに違いない。それはお便所を掃除していた時か、わざわざ弟子をお便所に連れて行って問答したのか。その辺のところはわからない。ともかくお便所も禅の修行の場である。おろそかにできない。お便所の時、現在では私たちはトイレットペーパーを使用する。当時は「乾屎橛」等が使用されていたようだ。だからとても大切なものである。現代の場面に置きかえればこうなる。「仏とは何ですか」「ほらこのトイレットにあるこのトイレットペーパーだよ」ということになろうか。

この『終わりなき山河』の詩集には今回取り上げた以外の詩行にも排泄物（大小便）の表現が見られる。スナイダーの画く終わりなき山河は宇宙の銀河系、太陽系、地球という広大な山水画である。それは道元禅師のいう画餅であり、一切の諸仏の現れである。それらは何十億年という悠久において循環している終わりなき山河である。真実である。その循環の画図を象徴している一つが排泄物である。だから道元禅師は語りかける。「大小便を行ずる時は、まさに願うべきである。衆生の汚れを除き去って、貪（むさぼり)、瞋（いかり)、痴（おろか）なる三毒をして滅尽せしめんことを」[46)]。

注

1）ジャック・ケルアック（Jack Kerouac）『禅ヒッピー』（The Dharma Bums）小原広忠訳（太陽社、1994、初版は1975年）、369頁。
2）Jack Kerouac, *The Dharma Bums* (Penguin Books, 1977), p. 130.
3）中野重治「解説として」峠三吉『新編　原爆詩集』解説　中野重治・鶴見俊輔（青木書店、2004）、148–149頁。
4）鶴見俊輔「1995年の解説」峠三吉『新編　原爆詩集』、160頁。
5）峠三吉『新編　原爆詩集』、56頁。
6）*The Japan Times on Sunday*, July 9, 2017.
7）Jack Kerouac, *The Dharma Bums*, p. 136.
8）『禅ヒッピー』小原広忠訳、207頁。
9）ジャック・ケルアック（Jack Kerouac）『ジェフィ・ライダー物語』（The Dharma Bums）中井義幸訳（講談社、1982、初版は1977年）、223頁。
10）田中泰賢「欧米名詩選集『海辺の歌』*Thalatta* 1853」『ジャパン　ポエトリー・レヴュー』第16号（2011）：5–13，参照。
11）『エミリ・ディキンスン事典』ジェイン・D. エバウェイン編、鵜野ひろ子訳（雄松堂出版、2007）、305–306頁。
12）同上、156頁。
13）古川隆夫『エミリ・ディキンスンの技法』（桐原書店、1981）、100頁。
14）岩田典子『エミリ・ディキンスン—愛と詩の殉教者』（創元社、1982）、131–132頁。
15）同上、132頁。
16）Jack Kerouac, *The Dharma Bums*, p. 30.
17）金岡秀友『さとりの秘密　理趣経入門』（筑摩書房、1986）、189–193頁抜粋引用。
18）同上、232頁。
19）Jack Kerouac, *The Dharma Bums*, p. 200.
20）この論文は『Buddha 英語　文化　田中泰賢選集 3 』（あるむ、2017）に所収。
21）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End* (Counterpoint, 1997), p. ix.
22）ゲーリー・スナイダー『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳（思潮社、2002）、11頁。
23）水野弥穂子訳註『正法眼蔵 3　原文対照現代語訳・道元禅師全集③』（春秋社、2006）、114頁。
24）西嶋和夫『現代語訳正法眼蔵』第六巻（仏教社、1983）、209頁。
25）水野弥穂子訳註『正法眼蔵 3 』、118頁。
26）同上、120頁。
27）増谷文雄『現代語訳　正法眼蔵』第四巻（角川書店、1973）、207–208頁。
28）玉城康四郎『現代語訳　正法眼蔵　（三）』（大蔵出版、1995）、396頁。
29）小倉玄照『修証義のことば』（誠信書房、2003）、106–107頁。
30）辻口雄一郎『正法眼蔵の思想的研究』（北樹出版、2012）、289頁。
31）同上、299頁。
32）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End*, p. 141.

33）『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳、232頁。
34）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End*, p. 145.
35）水野弥穂子訳註『正法眼蔵6』、24頁。
36）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End*, p. 133.
37）『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳、220頁。
38）松生恒夫（まついけ　つねお）『老いない腸をつくる』（平凡社、2013）、13頁。
39）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End*, pp. 120–121.
40）『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳、200–201頁。
41）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End*, pp. 92–94.
42）『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳、159–162頁。
43）Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End*, p. 51.
44）『終わりなき山河』山里勝巳・原成吉訳、91頁。
45）有田正光（ありた・まさみつ）・石村多門（いしむら・たもん）『ウンコに学べ！』（筑摩書房、2006）、69頁。
46）中村宗一他訳『全訳　正法眼蔵』巻三（誠信書房、1975）、38頁。